

[博士論文概要]

介護保険施設における湯灌(ゆかん:死後の入浴)の意義

平成28年度

宮 田 澄 子
筑波大学大学院人間総合科学研究科
ヒューマン・ケア科学専攻

目的	<p>我が国は超高齢多死社会であり、2025年問題を背景に看取りの場所は病院から在宅医療等（居宅、特別養護老人ホーム、有料老人ホームや老人保健施設等）にシフトする。そのため、今後はターミナルケアの教育、研修、実践の機会の乏しい介護職が、ターミナルケアに関与することになる。介護職が中心に湯灌（死後の任意の入浴ケア）を実施してきたA老人保健施設および関連事業所を持つM医療法人全職員を対象に、ターミナルケア態度についての実態と、ターミナルケア態度を高める要因および湯灌が及ぼす影響を検討する。さらに、多職種からなる湯灌経験者に着目し、湯灌の体験、効果や課題に関するアンケートから、介護施設でおこなう湯灌の意義を検証することを目的とした。</p>
対象と方法	<p>湯灌に関する先行研究の分析、高齢者施設職員の悲嘆についての先行研究の分析をふまえて、湯灌を実施しているM医療法人全職員を対象とした調査を行った。自記式無記名質問紙調査は2012年11月に実施した。M医療法人は、有床診療所（21床）、訪問看護ステーション、介護老人保健施設（入所100名・通所40名）、デイケアセンター（ショートステイ20名・通所40名）、グループホーム（9名、1ユニット）、在宅介護支援センターの常勤職員（看護と介護職員は非常勤職員も含めた）151名に、基本属性（性別、年齢、婚姻状況、所属事業所、職種や勤務年数、中間管理職経験の有無・資格や資格数）、湯灌の認知度、自分が利用者または患者だとしたら湯灌を受けたいか、関わった患者・利用者の死による悲嘆に対する対処方法（自由記載）およびFACOD-B-J（日本語版ターミナルケア態度尺度）について、全職員（全職種）で調査を行った。FACOD-BJの総得点の中央値で2分し、ターミナルケア態度の積極的群（高得点）と消極的群（低得点）を従属変数として各属性を用いロジスティック回帰分析にて関連因子を検討した。また、湯灌経験のある職員（直接介助・間接介助・見学も含めた者）を対象とし、湯灌を経験して感じたこと（13項目）、湯灌をするときに家族と行った方が良いか、印象に残った家族からの言葉やエピソード、湯灌経験は医療・介護職において、重要な経験と思うか（0～10段階で評価）、湯灌の意義や意味（自由記載）、湯灌に対する不安がある場合にその内容（自由記載）等を調査した。</p>
結果	<p>湯灌には、宗教や民族的なしきたりを背景とした葬祭儀礼としての湯灌と、病院や介護施設で行うケアとしての湯灌があった。日本においては、前者は家族が主体であったが減少傾向にあったが、近年は葬儀会社が主導をするセレモニーとして復活していた。ケアとしての湯灌は、病院や緩和病棟での遺族調査から、湯灌が遺族のグリーフワークになる可能性が報告されている。看護師の調査からは、湯灌を行う事で、亡くなくても人としてのまなざしが向けられるようになり、処置から看護として考えられるようになり、死後の入浴（湯灌）の継続が希望されていた。しかし、死の経験を強く思い出し配慮が必要な看護師もみられていた。</p> <p>全職員にFACOD B-Jを調査し、総得点の中央値109点で二分し、高得点群・ターミナルケア態度が積極的な群と、低得点群・ターミナルケア態度が消極的な群とし、これを従属変数として各属性を用いたロジスティック回帰分析にて関連因子を検討した結果、「資格を二つ以上持っている」「湯灌経験がある」が、ターミナルケア態度の積極性と有意に関連していた。</p> <p>また記述統計と自由記載の分析より、以下の結果がえられた。①自分が利用者ならば、湯灌を自分の勤務する施設で受けたいかについては、湯灌の直接介助をした職員の47%が湯灌を受けたい事を希望したが、間接介助者では20%、未経験者では26%であった。②湯灌経験者と未経験者における、利用者の死別による悲嘆の対処は、湯灌経験者では周りの人と話をする・ふり振り返り楽しかったことを思い出す・泣くという良い対処法を取り、さらに最も多かった対処方法は「次はもっと良いケアをしたいと考える」という大変前向きな考えで33%が持っていた。湯灌未経験者では仕事と割り切って感情を持たない・わからないという、良くない対処方法が多かった。③湯灌を経験して感じたことの13項目からの選択では、湯灌に対してポジティブなイメージの者が多く、ネガティブな感情を持つものは少数であった。④湯灌を家族と行った方が良いと大多数が返答し、その理由は家族のグリーフケアのために湯灌を勧める、利用者が入浴できて喜んでくれると思うので故人のためのケアをしたいから、家族と一緒に泣いて笑って、故人をしのべるからであった。⑤印象に残ったエピソードは家族から「嬉しさ・喜び」「感謝」の言葉をたくさん頂戴したことであった。⑥湯灌経験が重要という回答は多く、大変重要である（最高点の10）が最多32.7%（18/55）で、平均7.89であった。湯灌の意義や意味については、「湯灌で体を綺麗にし、血色が戻り、表情も良くなり旅立つことが出来て、みんなが喜ぶ。湯船にゆっくり浸かってもらい最後のケアをして、お別れの会話も出来て気持ちの整理もついた」と多職種は感じ、「家族のグリーフワークになる」が多くみられ、「職員のグリーフワークになる」と答えた者もいた。1名で、「本当に利用者が喜んでいてかわからない」と疑問を呈していた。⑦湯灌をする事の不安については、湯灌をやってみたら消失した不安は17名、存続した不安は12名、増大した不安は2名、新たな不安の出現は5名であった。内容は、入浴としてのスキルなどや、どのように家族とコミュニケーションをとるかが多く、感染症が2名、利用者が本当に望んでいたのが不安であるが1名であった。</p>

<p>考察</p>	<p>湯灌の認識はアンケートで知った者1割、当法人で初めて知った6割と認識は低かった。しかし現在では身近なケアとなり、全例ではないが看取り後に希望があれば家族と協働で行う、最後の入浴ケアとなっている。FATCOD B-Jの総得点は先行研究と比して、同等で、湯灌経験者が高いわけではなかった。ロジスティック回帰分析では、先行研究にはない新しい関連が示された。「資格を2つ以上持っている」「湯灌経験がある」の2つがターミナルケア態度の積極性に関連していた。資格が2つ以上あるものは資格を取るための研修を多く受ける、また教育歴によって資格が増える場合があり、研修に参加している者がターミナルケア態度が積極的であるという先行研究と合致している。湯灌経験者のターミナルケア態度が積極性が有意に高い事が示されたが、因果関係までは言及できず、ターミナルケアに積極的な職員が湯灌を自ら行っている可能性も考えられた。また湯灌経験者と未経験者における、利用者の死別によるグリーフへの対処方法は、湯灌経験者が良い対処方法をとっていて、「ふりかえり次はもっといいケアがしたい」と33%の者が前向きにケアまで考えているという、職員の成長にかかわるような結果もみられた。湯灌がターミナルケアに良い影響を及ぼし、職員の成長も期待できる有効なケア方法とも考えられたが、一法人の横断調査という限界はある。しかし、経験者の自由記載より、自らも受けたいと何らかの魅力を感じるケアであり、老人ケアをする者にとって重要なケアであると認識されていた。湯灌の時間は、家族のグリーフワークの時間であり、利用者が喜ぶケアと感じられ、また職員の悲嘆を家族と分かち合える時間になることで、家族と共に湯灌を行いたいと殆どの湯灌経験者は思っていた。</p> <p>重大なリミテーションとして、研究実施者が、研究対象でもある老人保健施設の管理者であることで、ネガティブな選択肢を選び難い、否定的な記述をし難かった可能性はあった。それによりポジティブな結果が多くなったため、湯灌が良いケアとして過大評価されたかもしれない事は考慮すべきである。</p> <p>今後の課題として、否定的な意見は殆どなかったが、不安要素は見られたため、よく吟味して対応する必要性はある。また、湯灌を行いたくない職員の自由を保障するシステムの継続も重要である。</p>
<p>結論</p>	<p>A介護老人保健施設で始まった湯灌は、多職種の前向きなターミナルケア態度に有意に関連していた。さらに、悲嘆に対する良い対処法をとる職員が多い傾向がみられ、もっといいケアをしたいと湯灌経験者は考えている事から、湯灌というケアを行う事が職員の成長に寄与する可能性もうかがわれた。今後、介護保険の施設における最後のケアとして、広く検討する意義があると考えられた。湯灌に対する不安や疑問点に対応し理解を深めながら、新しい死後のケアとして検討を重ねたい。</p>